手と手をつないで

No.391

山本　信哉（やまもと　しんや）
（元小学校教諭）

心のものさし(2)
～人の値うち～

この詩は作者江口いとさん自身の体験をもとにつづられています。被差別部落出身という理由で、自分のお子さん、お孫さんまで差別されるという現実に、いとさんは憤り、差別と闘いました。その差別に対する思いを詩に表現し、差別解消に向けて幾度となく講演をしてきました。その心の叫びがこの詩「人の値うち」の中にあふれています。

詩「人の値うち」は、「人びとはいつの日　このあやまちに気づくであろうか」という言葉で結ばれています。皆さんはどう思われますか。

この詩が発表されてから数十年が経っています。このあやまちを過去のことにできたのでしょうか。

- **人を着る物で判断すること**
- **話す人の肩書きや学歴によって講演の良し悪しを決めること**
- **人の価値を生まれた所によって決めること**

私たちそれぞれが持つ「心のものさし」は、生まれた所によって人の値うちを決めていないでしょうか。

福岡県と太宰府市でも、毎年7月を「同和問題啓発強調月間」として、差別をなくす取り組みを行っています（P10）。この機会に、この社会で生きる一人として差別の問題を考えたいですね。

人の値うち　江口いと

何時（いつ）かもんぺはいて
バスに乗ったら
隣座席の人は私を
おばはんと呼んだ

戦時中はよくはいた
この活動的なものを
どうやらこの人は年寄りの
着物と思っているらしい

よそ行きの着物に羽織を着て
汽車に乗ったら
人は私を奥さんと呼んだ
どうやら人の値うちは
着物で決まるらしい

講演がある
何々大学の先生だと言えば
内容が悪くとも
人びとは耳をすませて聴き
良かったと言う
どうやら人の値うちは
肩書きで決まるらしい

名もない人の講演には
人びとはそわそわして帰りを急ぐ
どうやら人の値うちは
学歴で決まるらしい

立派な家の娘さんが
部落にお嫁に来る
でも生まれた子供はやっぱり
部落だと言われる
どうやら人の値うちは
生まれた所によって決まるらしい

人びとはいつの日
このあやまちに気づくであろうか

（人の値うち：江口いと著・明石書店 1998. 1出版より引用）